

社常盤丸以下八隻其の他數隻總計約二十隻に之を装置したり。又大阪鐵工所も同所員西田保三郎の西田式過熱器及び同所の轉動式煙管掃除器を製造し、西田式過熱器も前記兩器と同様高度(華氏二百四十度)煙管内加熱型にして、掃除器と共に推奨すべき出色の特異點を有し、大阪商船會社あるぶす丸等五隻及び他船主の二隻に夫々装置して何れも燃料消費節約の目的を達したり。然るに高度蒸氣過熱器は斯く一部船主より多
 大の期待を以て迎へられたれども、ピストン汽機に於ては汽筒油使用量増加し、從つて汽罐給水の汚穢を來たし、延ひては汽罐に爐筒變形の
 事故續發したり。斯くの如きは給水處理裝置・汽筒内筒材料の改善・取扱の特別注意等に依り防止するを得べきも、之に依る船價の増加・事
 故防止の煩累等因をなし、ピストン汽機船の船主より忌避せらるゝの觀ありて該器の採用其の跡を絶ちたり。一方タービン汽機に於ては心須
 附隨設備として迎へられ、常盤丸以下のタービン汽機は全部之を裝備せり。

五、燃油裝置

重油の焚用が其の供給の便否・價格の如何に依りては石炭に比して頗る有利なるは明かなれども、内國の産油額豊かならず又世界に於ける
 供給地普からずして明治四十年頃には未だ之を使用するもの無かりしが、東洋汽船會社は其の航路の米國に於ける終點を桑港とせる爲め重油
 供給に地の利を享け、更に外國産原油に依る内國製油業者南北石油會社と原油運搬と重油受給との相互扶助的關係を結び、明治四十年天津丸
 級の新造に當りて本邦最初の燃油裝置を之に施し、次いで四十一年に英國より油槽船相洋丸一隻を購入し、天津丸にはラツソー・ロブキン
 と稱する水銀柱約三吋の壓搾空氣を噴油の作因となしたる低壓噴油器を、相洋丸等には高壓噴油器の鼻祖たるケルチング噴油器を夫々備へ爾
 來同社は本邦に於ける重油焚用の先覺者として常に其の利用に意を注ぎしが、南北石油會社の事業閉鎖に遭ひて内地の重油供給杜絶し、天津
 丸等も三つ年餘の間に石炭を使用して油・炭併用の方式を採りたり。又明治四十二年義勇丸を造る香丸は官原式水管爐に油・炭混燒を裝
 置して、重油を焚用して石炭を焚用し、三つ年餘の間に重油焚用は全く其の地位を占めし。然るに當時大體に當り、重油焚用は一般に石
 炭を焚用し又は雙方を混燒し得るT・K・K式炭炭併用裝置を考察し、既存に於て新造の殆んど船舶に裝備し、大に燃料費に對する輕便を
 増し且つ燃料費の輕減をなしたり。其の後大正十二・三年頃に至り邦船の航海圏の擴張に伴ひ重油供給の分布も普ねく且つ價格も安定し、一
 方歐洲大戰の後を受けて汽罐空人件費節約の如きも愈々重要となり、船主の一部に燃油裝置の採用を志すもの出でたり。即ち大阪商船會社は
 大正十一年に英國註文新造したるろんどん丸・ぱりい丸二船にウォルセンド・ハウデン式油・炭併用裝置を備へたるを初めとし、同十二・三年
 に同社船十三隻に、又廣海商會社は廣通丸に何れも同式裝置を夫々三隻造船會社及び大阪鐵工所に依頼して設備せり。其の後川崎造船所は
 英國ソーニークロフト式燃油裝置を其の社船・新造船並に國際汽船會社の船舶等總計約三十隻に、神戸製鋼所播磨造船工場は米國ダール式燃
 油器を帝國石油會社の橋丸等三隻に、横濱船渠會社は英國ホワイト式燃油器を日本郵船會社前橋丸等六隻に備ふる爲め、夫々製造權を譲り受
 けて其の製造設備をなし、我國汽船に於ける重油燃料の使用漸く盛んとなれり。是等噴油器は何れも高壓型に屬し、中ホワイト式は冷油の噴
 霧にも適するものなり。